

対談

井伏鱒二『黒い雨』を読む

石田 忠  
山本 和平

山本 長年本学で社会調査の講座を担当され、とりわけ原爆被爆者の調査研究にあたってこられた石田先生に、社会科学と文学とのかわりなどということを意識の片隅におきながら、井伏鱒二の小説『黒い雨』（昭和四十年十月、新潮社）を中心にお話をうかがいたいと思います。

先生は一昨年『原爆と人間』（連合通信社）を出版され、核時代をのりこえるための哲学を提示され、大きな共感をよびました。その中で多くの被爆者の証言とならんで、たとえば原民喜の詩などが引用されています。文学作品、特に、社会的現実の諸相をリアリステックに描

きとることを身上とする小説作品が、社会科学のなかで資料として利用されることはごく普通にあることだし、またあまりにも安易に、文学作品を単なる社会現象の資料として扱う姿勢にやりきれなさを感じることがありますが、先生のお仕事のなかで、たとえば文学作品はどのような位置をしめるものでしょうか。

感性の吟味ということ

石田 文学作品はまずは文学として享受すべきもので、社会科学の研究のためにあるわけでないことはいうまでもありません。しかし文学、ことに小説が、社会的現実

を描くという意味で、記録文書的人格、証言としての性格をもつことは事実でしょう。むろん「記録」とか「証言」というものも、素朴にこれを客観的事実として絶対化はできないわけで、体験を記録する人間、証言する人間のいわば「感性」を通したものであり、「感性」から発している点では、一般の人の証言のばあいも、文学のばあいも同じでしょう。

山本 あらためて言うまでもありませんが、『黒い雨』は閑間重松の姪の矢須子の縁談と鯉の稚魚の養殖の話という昭和二十四年の時点での物語と、閑間重松が日記を清書していく過程でよみがえる昭和二十年八月の原爆を中心とした戦争の時間とがあるわけです。現在と過去、平和と戦争、日常と異常、という二つの時間、二つの現実が相互に照らしあうという関係です。過去の記述の大部分が実在の重松静馬氏の被爆日記を基調にした被爆の体験記録という体裁をとっているわけです。ところで、先生が感性を通すとか、感性から出発するとか、感性を強調なさる意味はどこにあるのでしょうか。

石田 たとえば『黒い雨』という作品は、直接体験のない作者井伏が、多くの被爆者の証言のなかから自分の

感じとったものを想像的に構成したものでしょう。証言、記録に含まれるぼう大な事実のなかからなにを捨て、なにを取りあげるか、そしてどのようにこれを構成するか、そこに井伏の感性が働いている。言葉をかえれば、井伏の思想的立場が、感じ方としてでてくるはずで、「感性」を言うのは別に「実感主義」「実感信仰」を云々するためではありません。むしろ理論とかイデオロギー、思想的立場などは感性を通して実現される、したがって感性をそういうものとして吟味すべきだということですが、つまり、文学のばあいもわたしどもの社会科学のばあいも自分の感性から出発するよりほかはないと思いますが、しかし果して、感性というものはそのまま無条件に信じていいものかについてはわたしは否定的です。感性は吟味しなければならぬものと思います。これはわたしの戦地での体験ですが、貧しい中国民衆の食事の様子をトランプの上から眺めながら、「彼らはなんの生き甲斐があつて生きているのか」と感じたものです。これは占領者の傲慢さから生まれた感じ方であることを、あとになって、知りました。彼らも人間的な喜怒哀楽のうちに生きており、われわれ同様幸福を願って生きているのです。

むしろそれを困難にしていたのがわれわれでした。何の生き甲斐があって生きていくのかと彼らを見た時のわたしは占領者の意識、武力に支えられた権力、その権力にのっかっての優越者の感じ方だったと知りました。中国から南方戦線へ移りました。そしてその住民パプアの人たちの素朴な生活にふれることができました。ある時若い恋人同士の様子を見かけたことがありました。私はその恋人同士を美しいものと見た。同じ人間と感じた。彼らを未開人だとか生き甲斐があるのかなどと見るのは、まことに傲慢な見方であると思った。なに事も「わたしの感じ」から始まるほかないわけだが、その感性は吟味されねばならないわけです。だから『黒い雨』を読むばあいにも、井伏の感性、立場について注目し吟味しないわけにはいかないわけです。自分にはとらえられないものをどうして井伏にはとらえ得たのか、私は心をうたれました。彼の原爆を見る立場、彼の思想に胸をうたれるわけです。読書は作者と読者との対話ですが、その対話を盛んにしてくれるような小説を読んだ時にああ文学だなあという気がします。

山本 なるほど、なにごとく自分の感じとったものか

ら出発せねばならぬにせよ、「実感」を即的に絶対化してはいけない、吟味せよということですね。軽蔑の対象として最初映っていた中国やパプアの民衆が、同じ「人間」であるという認識を、感覚を、妨げていたのは権力者の意識であった、それを洗い出すことが必要だ、という……

石田 こちらの感性の正体をえぐり出すような形で相手がこちらに迫って来たときにはぐさっと来ます。こちらが絶対だと思っていたものがぐさされるわけです。

### 「地獄」について

山本 ところで『黒い雨』という作品に先生を引き寄せたもの、それは一体なんだったのでしょうか。

石田 被爆者にあっていて彼らがあの時のことをあれは「地獄」であったと言う。何をさして地獄と叫んでいるのかは明確でない。それはたしかにむごい死であったわけで、そういう死、そういう状況は地獄絵にかかれていくような……ところが絵とか写真とかがいかにリアルでも、写真に映らないもの……たとえばわれわれの学ん

でいる「社会」などは目に映らないが、しかしそれは社会学者にとつては決定的なものである。それと同じように「地獄」というものはそういう惨酷なシーンの単なる集合ではない。一つ一つの光景、シーンは「地獄」の現れではあつても「地獄」それ自体ではない。「爆心地の復元」ということが云われるが、もっと重要なのは「地獄」の復元ではなからうか。原民喜が「バット剝ギトツテシマッタアトノセカイ」と言う、人間的なものの一切を奪われた世界、それが地獄である。このことを考えるようになってから『黒い雨』の読み方が変わったわけですから。——被爆者のいう「地獄」とはいったいどのような状況のものであつたのかを認識する、そのために『黒い雨』を読み返そうということでしょうか。

石田 重松が可部行き電車に乗って車内の乗客たちの話を聞くとところがある。

みんな今日の爆撃のことについて話し、誰しも互に連関なく自分の見聞したことしか云わなかった。だから、みんなの話を総合しても災害の全貌は知れな

いが、僕は記憶するままにその話をここに書きとめる。(新潮文庫・一一八頁)

そのひとつに少年の話というのがある。

座席に腰をかけていた少年が、金壺眼の横に立っていた婆さんに席を譲った。中学三年生か四年生ぐらいの少年である。

婆さんは感謝の気持か、または好奇の気持を起したのだらう。その少年が話し相手になろうとしないうのに頻りに話しかけ、被爆したときの様子を云わせようとしたり。少しくどすぎた。すると少年は気を悪くした風で一氣に喋った。大体において左の如き話である。

この少年は火の玉が閃いたときには家のなかに入らなかつた。ぱつと光を感じ、ごうつと音がしたので外に飛び出そうとした。同時に家が崩れて失神した。気がついたときには、梁か何か太い木材の間に挟まって、自分の父親がその木材を取除けようとしていて、ころであつた。父親は「しっかりせえ」と励ましなが

太を挺子に使っていた。もう火の手が迫って来て、崩れた自分の家に火が燃え移っていた。父親は「おい早く足を抜け」と言ったが、足首を木が挟んで動かせない。火事は三方から迫っていた。父親は辺りを見まわして「もう駄目じゃ、勘弁してくれ。わたしは逃げる。勘弁してな」と云ったかと思うと、丸太を放り投げて逃げ出した。少年は「お父さん、助けて」と叫んだが、父親は一度振向いて見るだけで消え去った。少年は、がっかりして材木と材木の間に身を沈めたが、足首の束縛を不意に感じなくなったので材木と材木の間から這って出た。

魔法の環のように不思議に抜け出せた。それで火事の切れ目に通じる道を駆けぬけて、三滝町の伯母さんのうちへ駆けつけると父親がいた。幸か不幸か、父子のこんな対面には伯母さんも云う言葉が無かったようであった。父親は何とも間の悪いような顔をした。少年はその場を逃げ出して、亡くなった母親の里へ行くために、現在、可部行のこの電車に乗っている。

少年は喋り終ると眉をしかめて口をつぐんでしま

った。婆さんは叱られでもしたかのように、きちんと腰をかけて項垂れたきり何も言わなかった。手拭を姐さんかぶりにした六十前後の品のいい婆さんであった。(二二三頁)

石田 この少年の話は、わたしは『黒い雨』の中でも原爆のむごさ、恐ろしさを示す重要なエピソードだと思う。父親は少年を助けようとするが火が迫って来たので置き去りにして逃げる。偶然足が抜けたので少年は伯母の家へにげて行く。するとそこに父親がいる。いたたまれなくなった少年は母親の里へ行くべく電車に乗っている。はたしてこの父子の人間関係はこのあとどうなるだろう。修復できるだろうか。また父親は生涯罪意識になやまされることになるのではないか。原爆投下によって父親が父親であり続けること、人間が人間であり続けることが許されない状況が現出したのである。わたしは父親を倫理的に非難することはできない。少数の英雄、少数の殉教者の方ばかり向いていると、英雄でも殉教者でもなかった普通の人たちは、その人自身の責でそうなりえなかったかのように見えてくる。しかしわたしはそう

は思わない。自分がもしあの父親の立場におかれたら自分もまた同じような行動をするのではないかとこの恐れを感じる。とすれば、そういう状況に追いこまれないように努力して行くこと、そういう状況をつくらせないように努力することよりほかはないと思う。

山本 子供と再会した父親は「何とも間の悪いような顔をした」とありますね。この「間の悪さ」は複雑ですね。少年がはたしてこの婆さんとの話で実際に「父親は何とも間の悪いような顔をした」と言ったかどうか、「何とも間の悪いような顔をした」という表現は作者のものでしょう。

石田 井伏が想像力で補ったものでしょう。「間の悪い」という言葉は『黒い雨』に三箇所出てきます。父親は自分の行為を恥じている。恥の意識です。

山本 少年はいわば見てはいけなない父親の弱点、しかも決定的な弱点を、子供を見殺しにするという弱点を見つけてしまった。父親にしてみれば、自分の決定的弱点をつかんでいる息子の予想外の出現に驚かざるをえない。息子の生存を喜ぶというふうにはならない。息子の生存は、彼のいわば「犯罪」の証人の生存ということになる。息

子の生還を喜ぶべきか、わが「犯罪」の証人、あるいは被害者の出現を恐れるべきか。わが息子をおのが命にかけてあくまでも救出することを断念し、焼死確実の状態のまま見捨てたという行為——これを彼は罪として、人倫に反する行為として、自覚している。父親は、息子は当然にあのまま焼死したはずと思っていた。見捨てて来た息子の出現は、彼の「罪」を糾弾するはずである。息子の生存はかくて父親にとっては喜びであると同時に恐れを生む。父親は、息子の批判、糾弾のまなざし、裏切られたる者の絶望のまなざしの前でうろたえるだろう。

それが「何とも間の悪いような顔」として現れる。そして「少年はその場を逃げ出し」たとあるが、もはや保護者たる資格のない、父親としての信頼と権威を失った父親を正視するに堪えなかったのでしょうか。また少年の話聞き終って、「婆さんは叱られてもいたかのよう……何とも言わなかった」とあるが、この婆さんのこの時の内面も複雑でしょう。なぜ叱られたように黙ってしまったのか。西洋の近代小説なら、父親、少年、老婆それぞれの内面の過程を、おそらく数頁にわたって書くにちがいないが、井伏は実に淡々と、「気を悪くした風で」

とか「間の悪いような」とか「叱られでもしたかのよう  
に」とか、その表情の簡潔な描写のなかに、おそらく複  
雑混沌たる内面をとじこめ、括ってしまふことができる  
わけです。

**石田** 父親が人間として自分の行為を恥じている。恥  
じている、とは書いていないが、父親としてあるまじき  
行為をしたと思っっているわけです。自分が生きるか死ぬ  
かの極限状況下において父親の行動を律していたのは自  
己保存の衝動だけであった。しかしこれをとがめること  
ができるでしょうか。少くとも同じ道を行ったこととな  
い者にはこの父親を批判する資格はないでしょう。

**山本** しかしだからといって父親は自らの行動を正当  
化できないわけです。

**石田** だから原爆はむごいと思ひます。償いよう  
がない。これは死ぬまで心の傷<sup>トラウマ</sup>として残るものでしょう。

**山本** 子供を裏切ったという意識を背負い続けねばな  
らない。

**石田** そういう罪意識を背負わせるもの、それこそが  
最も責めらるべきである。原爆はだからいけないとわた  
くしは言うのです。原爆は無差別大量の殺りくを行った

だけではない。家族・近隣・職場そして地域社会といっ  
た、あらゆる「社会」を破壊した。「社会」という「生  
のメカニズム」が破壊されると、人間は個に還元される。  
その時人はもはや人間的、道徳的でありつづけることが  
できなくなる。ただエゴイスチックな、自己保存の行動  
しかとれなくなるのです。同じような話がほかにも二箇  
所に出ている。ここでは引用だけしておきます。

堤防の上の道のまんなかに、一人の女が横に伸びて  
死んでいるのが遠くから見えた。……近づいて見る  
と、三歳ぐらいの女の児が、死体のワンピースの胸  
を開いて乳房をいじっている。……

どうしてやるすべもないではないか。そう思うより  
ほかに手がなかった。とにかく女の児を驚かさな  
いように、僕は死体の足の方をそっと越え、すたすた  
と十メートルほど下って行った。(一〇九頁)

茨の茂みから人の喚き声が聞えて来るような気がす  
るが、夢の中で逃げているようなもので救助の方法  
がない。火は迫って来る。顔が次第に腫れて来て疼  
痛が増して来た。歩みはなかなか抄らない。この惨

状を目のあたりにして、人ひとり救い出せない医師としての自責の念に駆られながらも、逃げることで精いっぱいだった。(二五二頁)

### 感性の死

山本　　そういう状況は常に起りうるもので、ナチの絶滅收容所にもありましたね。

石田　　自らも收容者だった心理学者のV・E・フランクルは、『死と愛』という著作の中で囚人の「精神的変容に関する一見抵抗しがたい收容所法則」ということを言っている。強制收容所に入れられた囚人たちが、その中で次第に非人間化されて行くわけで、ナチはそうした非人間化を自覚的に意識的におこなったわけです。強制收容所の囚人たちは、同じ仲間の囚人で殺された人、苦しんでいる人、今死にかけている人、そういう人たちにたいして心を動かされること、可哀そうだと思ったり、そういう目にあわせるのは理不尽だなどと思ったりすること、そのように憐憫とか倫理とかをもつこと自体を許されなかった。また便所掃除の時、糞尿のはねかえりを拭おうとするとたちまちカボになぐられる。嫌悪といっ

た反応さえも許されない。囚人は「人間」であってはいけない。あくまでも「人間」以下の存在でなければならなかった。そういう世界に馴致された人間は、人間的な情緒的反応ができなくなってくる。この情緒的反応についてはP・レーヴィが『アウシュヴィッツは終わらない』(朝日選書)という收容所体験の考察のなかで、「内なる聖なる火花」という言い方をしており、そういうものを強制收容所は奪ってしまったという。フランクルはそれを「情緒エモレヨナルの死」(「内面的な死」と、呼んでいる。内面の死をとげると、あとには自分の生物的生命を守ろうとする衝動だけが残る。それを「人の非人間化」と云う。この強制收容所に貫徹していたと同じ法則が、原爆のもたらした極限状況下でも実現したのではないだろうか。

### 庶民の立場

山本　　井伏さんはこの少年の父親を決して非難の対象にしてはいないわけで、逆に人間にそういう行為を強制する原爆、戦争を批判しているということですね。

石田　　そうです。井伏さんは政治論をやるわけではな



い。しかし戦争そのものにたいする批判はもちろん、この戦争を起こす「組織」なるものを庶民の立場からはっきり見据えている。『黒い雨』の中から気がつくままに引用してみましよう。

戦争というものは、老若男女を、颯殺しにするものだということがよく分りました。(七一頁)

この貧相な幾つものお祭は、昔の百姓たちが貧しいながらも生活を大事にしていたことの象徴のようなものである。重松は清書を続けながら、あの阿鼻叫喚の巷を思い出すにつけ、百姓たちのお祭が貧弱であればあるほど、我れ人ともに、いとおしむべきものだという気持になった。(一〇三頁)

この死人は生前、倅が人間魚雷の学校に志願するのを引留めなかったのだろうか。戦争は人間の判断力を麻痺させてしまう。(一四六頁)

広島に爆弾が落ちてから、がたがたと急に世相が荒

れて来たのではないだろうか。いつか人から聞いた話だが、大きな戦禍があつた地域では、百年たたたないと住民の悪ずれが払拭されないと昔は言われていたそう。それは本当のことだろうか。(一五二頁)

戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済ませなければいい。いわゆる正義の戦争より不正義の平和の方がいい。(一六五頁)

況んや死体は生前には人間である。

「この屍、どうにも手に負えななのう」

トタン板を昇いて来た先棒の兵がそう言う、

「わしらは、国家のない国に生まれたか、たのう」と相棒が言った。(一六六頁)

私は帰って来て主人にその通り報告しましたが、『そうか、戦争のせいだ』と言っておりました。戦争というものは、そういう人間をこしらえる必然性を持っていて、良いことは何ひとつ生まないと主人は言うのです。(二六八頁)

ただ人間の意志ががんにがらめに縛られて、不平はおろか不安な気持ちさえも口にするのを押し殺しているだけだ。組織というものが、そうさせている。(一九五頁)

それにしてもピカドンが落ちる前に降伏することは出来なかったのか。いやピカドンが落ちたから降伏することになったのだ。しかし、もう負けていることは敵にも分っていた筈だ。ピカドンを落す必要はなかったろう。いずれにしても今度の戦争を起こす組織を慥えた人たちは……(三〇〇頁)

(以上傍点引用者)

石田 井伏鱒二という作家は、庶民を、生活者を描く作家といわれているが、その姿勢はこの『黒い雨』にも一貫しているわけで、井伏は庶民の原爆体験をもとに、徹頭徹尾庶民の立場に立っている。だから人間の立場からする、原爆批判が可能になった。

山本 「庶民」というのはどうも難かしい概念で……

石田 この文脈でいえば「戦争を起こす組織を慥えた人たち」ではない人たちがむしろ「組織」によって「がんにがらめに縛られて」いる人たち……。原爆を政治論的に、あるいは軍事論的にのみ考える、核政策を進める人たちではない人たちです。井伏は、戦争によって「斃殺」にされる老若男女に身を寄せて、「庶民」の立場に立ってものを見ているのです。「組織を慥らえた人たち」というのは、組織のもっている意味だとか、その組織の存続云々などというところからやって行かなければならないであろう。「庶民」というのはそんな「組織」ではなく「人間」の立場からものを見ていく。

井伏さんにとって、戦争批判、戦争を起こす「組織」への批判が庶民の立場に立たせることになったのか、それとも、そもそも庶民の立場に立つ作家だからこそ戦争、国家批判におのずから目が開いたのか……いずれにせよ、「組織」の側ではなく「人間」の側から原爆を見たわけで、そこから『黒い雨』を発想している。この井伏の方法は、私たち社会学者にとって「立場」の問題を考えさせてくれるし、また社会調査家としての自分の感性を反省する意味で、教えられるところが多い。

死者の証言

山本 社会調査家としての感性の反省というのとは？

石田 たえばあの父親に見捨てられた少年……彼は偶然にも足が抜けて焼死を免れた。しかし大多数の人は生きながら焼かれて死んだ。助けに来てくれる人を信じて死んでいったわけです。われわれ社会調査家がとれる証言というのはむしろ生存者のそれです。しかしほんとうに欲しいのは——原爆の非道さを知るためには——あの時死んで行った人たちの証言なのです。死者の証言を聞くためには社会学的手法では到底不可能であり、どうしても文学的想像力にたよらざるをえない。あの時も少年の足が抜けなかったとしたら、少年はどのような思いで死んだであろうかと想像する。つまりフィクションを構えてみる……

山本 その点井伏の文体は抑制がききすぎではいませんか。十分に想像を展開しきってないという点で不満ではありませんか。原爆小説としての『黒い雨』の方法については、たとえばリフトンの、『長い航海』とか『血の雨』などの「強制收容所小説に見られるような、手法

上の画期的な実験の類」がない、「原爆体験のまったく新らしい特質に対応する、手法上の等価物をなんらもない」という批判があります。あるいはまた「『黒い雨』は透明で気品がありすぎるのが欠陥で、……広島の惨禍は、もっと無鍛練・無教養の誰かが一途の執念で下手くそに書いた方がいいのではあるまいか」という開高健の指摘等、文体が主題にそぐわない、小説としてリアリスチックな臨場感に欠けるといった批判がいろいろあるわけです。このことは井伏自身承知していて河盛好藏との対談（中央公論社刊『日本の文学 井伏鱒二集』月報）の中で、彼自身、大田洋子、原民喜、大江健三郎などに言及しつつ「人によってみなちがうでしょう。僕はそう深刻なものを出せないな。僕が書くとき原爆が駄目なんだ」と言っています。

石田 臨場感を与えてくれないということは私もそうだと思いますが、対象との距離をおきながらとらえるべきものはきっかり描いていると思う。先ほども確認したように被爆下の人間行動が「庶民」閑間重松のプリズムを通して描写されていると思う。文学作品からは私としても学ぶべきものが多い。とかく社会学の方法で自己満

足しがちだけれど、ほんとうに原爆被爆の問題を扱おうとすると、どうしても学際的でないとだめです。しかし社会調査、社会心理学等、諸学の単なる集合ではとらえきれないことがわかってくる。在来の社会科学の方法ではだめなんです。

### 学際的とは

山本 「学際的」<sup>インターディシプリナリー</sup>とは既成の諸学の枠組みが破産したということですね。

石田 長年被爆者調査をやってきてその中で痛切に感ずるのですが、むしろ社会調査にとどまらない、社会科学をやっている人にとどまらないが、文学なり、文学による人間把握、社会認識にはもっと謙虚に学ぶべきだと思う。作家本人はむしろん教説を垂れる気で書いてるわけではないが、科学者の方はなまじ科学者であるがゆえにとらええない真実があるのではないかということに反省する上においても、文学の存在は非常に重大であると私は思う。

山本 「感じる」ことがなければなにもはじまらない」と先程言われたが、それは学問的な装置だけで、厳密な

論理だけで学問が成立するという思想の破産の認識ですね。壊れたところから、感じることから始める……

石田 言うまでもないことだが、科学では抽象能力は必須である。具体を理解する手段として抽象を行う。しかし抽象したものの中でその完結性のなかで安住することは拒否しなければならぬ。また抽象して行くばあいには、現実に戻る契機を失ってしまうところまで抽象してはいけない。またわれわれは、「人間だから」という言い方でしか表現できないが、われわれは「理性」それ自体になれるわけがない。だのにあたかも自分が「理性」それ自体になりえているかのような虚妄に安んじてしまう。特に大きく歴史が転換する時代にはそれではいかんと思う。そういう意味で、社会科学の総合を旨とする一橋大学においてこそもっと文学を読ませること、文学の研究と教育が必要だと思う。

### 人の名を呼ぶこと

石田 さっき死者の証言が欲しいということを使ったけれど、むしろそれは事実上不可能なことである。想像的にしか可能ではない。たとえばあの父親に見棄てられ

た少年がもしあのまま足が抜けなかったとしたらどうであろう。恐らくは焼け死んだであろうけれど、死んで行くとき彼は誰の名を呼ぶことができたであろうか。少くとも父親の名は呼べなかったろう。人は死の恐怖をのり越えるために人の名を呼ぶということ、呼びかけるということがある。それは自分の存在を歴史に結びつけること、たとえば、ある家族の中で、死を前にして親に感謝をし子の幸福を祈るという形で、自分を歴史に結びつけていく。つまり呼びかけることによって自分の愛情の対象に自分を結びつけていけるばあい、われわれは死ぬるのではないか。いわゆる生物学的な死は、いかに末期のときに苦悶の表情を浮かべていたにせよ、死に行く本人にはそれ自体はそれほど苦痛として自覚されるものではないのではないか。だから生物学的な意味での死を迎えることは簡単だと思ふ。生物学的にはなく人間として死ぬときには、自分の愛情の対象、すでにこの世にいない親にしろ、後に残る者にしろ、呼びかけ、呼びかけることで己れをこれらの人々に結びつけて行く。このことが重要なのだ。それをゆるさないような状況を原爆はつくり出した。そこにおける死のむごさを思うとき、私は

原爆の反人間性を感じないではいられない。死を自覚して人の名を呼ぶことの意味の重大さを思うとき、あの広島少年が、もしあのまま焼け死ぬとしたら、彼の不幸これにすぐるものはないと思う。

### 「祈り」ということ

山本 『黒い雨』の最後に五彩の虹のヴィジョンがでてきますね。

石田 あれあわれですね。

山本 重松の「被爆日記」の終りは八月十五日の記述で、工場の用水溝が意外にも「透き徹った」「清冽な」流れで、その流れのなかを無数の小さな鰻の子が行列をつくってのぼっていくのを見る。敗戦を知って「ほっとした瞬間の涙」を流したあと――

もう一度鰻の子の遡上を見るために非常口から裏庭に出た。今度は慎重に足音を殺して用水溝に近づいたが、鰻の子は一びきも見えないで透き徹った水だけが流れていた。

この八月十五日の記述で、重松が清書しつづけてきた「被爆日記」は終る。そして

その翌日の午後、重松は孵化池の様子を見に行った。毛子の成育は上々で、大きい方の養魚池の浅くなって片隅に蓴菜もろこぎが植えてあった……

「今、もし向うの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹ではなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ」

どうせ叶わぬことと分かっていても、重松は向うの山に目を移してそう占った。(三〇九頁)

水に棲む魚が多産性の、したがって生命の象徴となるのは世界中にみられるわけで、「ホロコースト」にもかかわらず脈々と続く生命の流れを信じたいのですね。

石田 「広島が爆撃された八月六日ごろはどのあたりを遡上していたことだろう。」と重松は考える。生命の連続性を見ようとする。

山本 「五彩の虹」は祈りでしよう。

石田 祈らざるをえないわけです。祈っても原爆症が

治るわけではない。「どうせ叶わぬことと分かってい」る。にもかかわらず、五彩の虹が出てほしいと思う。それが生きるものの姿ではなかるうか。現実に「五彩の虹」が出たかどうか、また出たとしても矢須子の命運はきまっている。しかし出てほしい、出たらなおる、と重松は自分に言いよかせる。

山本 たとえば鰻の子とか五彩の虹とか、ひとつのヴィジョン、まぼろしに縋って、混沌に秩序を与え、なんとか現実をのりこえたいといういわば「祈り」とでもいう願望はだれにでもあるでしょう。

#### 原爆と人間

石田 最後に一言つけ加えておきたいのは、井伏さんの立場はもっぱら被害者の立場であって、加害者の立場が抜けおちているという批判があることです。特に『黒い雨』に関してそういう批判がある。しかし被害者の目からしか見ていないという批判はあたらなと思う。被害者と加害者の立場を統一するものは、戦争否定の立場のほかはないが、井伏は戦争批判を厳しく行っていると私は思っている。戦争への基本的批判は、被害者が単な

る被害者としてではなく、「人間」の名において、自分が「人間」であるという自覚の中で発言することだと思ふ。たとえば作品中の細川先生は「広島に落ちた新型爆弾」について、「実に凄い化学品が出来たものだ。しかし、こんなもので人間を殺そうという料簡を起してはいかないのだ。そんなことをしてはもう無茶苦茶だ」(二二三頁)と言っている。「原爆」を「人間」に対置するこの細川先生の視点は、私の原爆調査における基本的な視点、私の営為を支える基本的バースペクティヴです。文学と社会学とでは方法も提示されるものも異なるが、基本的視点は同じである——原爆とは人間にとってなんであるか、「こんなもので人間を殺そうという料簡」、この絶滅主義の思想、敵とあらば老若男女を問わず殺すという思想の批判です。

今の原水禁運動でいちばん大事なものは、そういう「料簡」、思想を批判し、たたかうことではないか。たんにこの次は「核の冬」で、死ぬ番が自分に回ってくるから反対だ、というようなものであってはならない。核時代を生き残る思想とは「こんなもので人間を殺そうという料簡」とたたかう思想です。

前にも引用したが「国家のない国に生まれたかった」という願望とか「戦争を起さず組織」への呪詛とか、『黒い雨』には庶民の反「組織」、反「国家」の感覚があるが、わたしは『原爆と人間』の中で、何億何千万という人間を殺してまで守らねばならぬものがはたして存在するのか、国家とか体制とかがそういうものなのか考えてほしいと書いた。人間を国家の上におく思想が確立されなければ、庶民は生き残れないというのが核の時代であると思ふ。原爆体験の思想化の営みは私たちをこのころまでつれて来るのではないか。

人間が自らを交えて行くことを怠らないかぎり、人類はまだ生き残れる。人類史の中で「国家」などはある段階で生じ、ある段階で消滅していく、そういう性格のものであると見ること、人間の生に矛盾するような組織や体制は、人類が生き残るためにはやがては克服さるべきものであると認識することが大切なのではないか。

山本『黒い雨』の示唆するところもおそらくそのことでしょうね。ありがとうございました。

(一九八五・九・二 社会調査室にて)

(一橋大学名誉教授)・(一橋大学教授)